

【資料紹介】

『創立十周年記念 大東文化協会 大東文化学院 創立沿革』及び『創立十周年記念号 大東文化協会 大東文化学院』について

浅沼 薫奈

はじめに

本稿で紹介する資料は、本学創立 10 周年を記念して刊行された 2 つの冊子である。『創立十周年記念 大東文化協会 大東文化学院 創立沿革』（以降、『創立沿革』）及び『創立十周年記念号 大東文化協会 大東文化学院』（以降、『記念号』）と題された 2 冊は、それぞれ 1932(昭和 7)年 10 月 13 日、同年 12 月 25 日に刊行された。

なお、大東文化学園及び大東文化大学の前身となる、大東文化協会の創設は 1923(大正 12)年 2 月 11 日であり、大東文化学院は同年 9 月 20 日に設立認可を受けた。そのため 10 周年記念事業とは、本来 1933(昭和 8)年に行われるものではないかと思われるが、本学における 10 周年及び 20 周年は節目を迎える前年、すなわち 10 年目及び 20 年目に記念事業を開催している。この 1 年のずれは、年齢を満で数えるか、数え年にするかと同じであろう。

因みに、新制へ移行して以降、すなわち創立 30 周年記念事業が 1953(昭和 28)年 9 月 20 日に開催されて以降は 90 周年を迎えた 2013(平成 25)年に至るまで、10 年ごとの節目を「満」で数えて記念事業を展開してきている。では、旧制期において他の高等教育機関も「数え」で記念事業を行っていたかということ、そうではなかった。それぞれの学校の状況によっては前後に 1 年ほどずれることもあったが、多くの場合、周年事業は「満」で数えて行われていたようである¹。

さて、本稿で紹介する両誌の紹介に戻ろう。両誌を見てみると、内容は大きく異なるものとなっている。『創立沿革』は、大正期漢学振興運動から大東文化協会の立ち上げに至る経緯を主として詳しく紹介しつ

つ、「附録」とされた後半部分が大半を占める内容となっており、その発行日(昭和7年10月13日)から、同日に行われた「創立10周年記念大会」において来賓へ配る記念誌として作成されたものであったと考えられる。対して、『記念号』は、主として同記念大会の記録を取めたものであった。

発行人は、『創立沿革』は川口壽、『記念号』は平野彦次郎とあり、編集委員会に相当する「十周年記念出版部」委員の構成については後述するが、ともに同出版部から刊行された記念誌であり、同出版部は「創立十周年記念会」とも称している。

両誌を見て最初に気づくのは、表紙を開くと見える口絵写真の構成の違いであろう。『創立沿革』は「建議案説明の立役者」と題した5人の肖像写真が掲載され、「歴代正副会頭」、「歴代学院総長」、「協会現幹部(副会頭及常任理事)」と続く。一方の『記念号』では、創立10周年を記念して披露された校旗と学院歌が最初に掲げられており、次頁に大東文化学院総長と大東文化協会副会頭の肖像写真とともに九段校舎の写真が掲載されている。

このように、両誌の内容や刊行目的は全く異なるものとなっており、10年目を迎える大東文化協会及び学院の沿革を伝えることを目的として発行された『創立沿革』に対し、「創立十周年記念大会」(記念式典)の内容を取めることを目的としたものが『記念号』であった。

以下、両誌の誌面構成や内容、執筆者などについて紹介していこう。

1. 『創立十周年記念 大東文化協会 大東文化学院 創立沿革』について 最初に、全体の誌面構成を説明し、特徴を指摘しておこう。

前述したように、最初に口絵写真が8枚分、ページ数にして16頁にわたって多くの写真が掲載されている。「建議案説明の立役者」と題された1頁目の口絵には、中央にやや大きめのサイズで木下成太郎²が配され、四方に戸水寛人、山本悌二郎、佐々木安五郎、副島義一の写真が

掲載されている。

続いて次頁には、「歴代正副会頭」として、4人の肖像写真が掲載され、上にやや大きく初代会頭である大木遠吉、その下に大島健一、小川平吉、江木千之となっている。次に「歴代学院総長」として、平沼騏一郎、井上哲次郎、大島健一、鶴澤總明、加藤政之助、大津淳一郎の肖像写真が見られ、その後「協会現幹部」として、酒井忠正、山本悌二郎、木下成太郎、荒川五郎、山崎達之輔、末松偕一郎といった面々の写真が配置されている。

続く口絵写真には、青桐に囲まれた九段校舎のほか、1923(大正12)年9月1日の関東大震災で焼失した旧大東文化協会事務所も見られ、貴重な一枚となっている。役員室、図書室、剣道場といった校舎内に加え、開院式で祝辞・式辞を述べる大木会頭及び平沼総長の写真もある。以下、それぞれの写真に付された説明書き(タイトル)を示しておく。開院当時に恒例行事であった「伊勢神宮参拝」から始まり、「新宿御苑拝観の様子」「辜鴻銘(大東文化学院臨時教授)講演会 招待会」「鶴澤總明博士講演」「大木会頭北越講演」「オイケン・ヘリーゲル博士講演」「ゾルフ独逸大使招待会」「プラタプ氏ボース氏招待会」「東洋文化振興講演会」「思想問題大講演会」「夏季学生巡回講演会」の様子の写真等々が掲載されている。これらからは10年間の歩みを示すミニアルバムのような印象を受ける。

一方、以上のなかには学院内での現職の教員、主要な教授陣の名前がほとんど見られず、一方で「協会現幹部」たちの肖像写真ばかりが多く掲載されている点にはやや不自然な感があり、これらの選定には恣意的なものがあつたかもしれない³。

本誌の内容(構成)について、「目次」は次のようになっている。

第一章 東洋文化振興提唱の由来

第二章	第四十四議会に於ける漢学振興運動
第三章	第四十五議会に於ける漢学振興運動
第四章	第四十六議会に於ける漢学振興運動及政府の贊助
第五章	大東文化協會の成立
第六章	大東文化学院の開設
第七章	結 言
附 録	一、重要日誌摘録
	二、第四十四議会に於ける戸水寛人博士及佐々木安五郎氏 演説速記録
	三、第四十五議会に於ける山本悌二郎氏及び副島義一博士 演説速記録
	四、第四十六議会衆議院委員会速記録
	五、東洋文化振興に関する第二回協議会議事速記録
	六、大東文化学院開院式祝辞並式辞
	七、物故役員教職員氏名表

『創立沿革』は、以上のような構成であった。内容としては、大東文化協會を設立するに至る帝国議会における提唱(建議案)、漢学振興の運動に関するものが主であり、その後大東文化協會及び学院の開設へ至る旨がごく短く記されている。具体的なカリキュラムなど学内の教育内容がわかるものは見られない。

「附録」として収録された内容は興味深く、「重要日誌摘録」は年表形式となっており、大東文化協會及び学院の主要人事記録や講演記録などが中心に記載されている。しかし、この「附録」の中心もやはり帝国議会衆議院における演説速記録であり、創設までの経緯が非常に重視されていたことがわかる。その内容からは、「漢学振興ニ関スル建議案」がいかにして議論され、3度にわたる議会の審議をどのように経たのかを、創設後10年を経た段階で今一度確認しようとしていたことが伝わっ

てくるものであった。

具体的には、「漢学振興ニ関スル建議案」が最初に提起された第四十四議会において、戸水寛人と佐々木安五郎による発言から、議会内では「漢学振興」を「簡単」な事案であると軽視している向きがあるが、国政を揺るがす非常に大きな案件であることを主張していることがわかる。翌1922(大正11)年、第四十五議会においては、山本悌二郎と副島義一が同案に関する発言を行い、漢学振興とは東洋古典文明の復興であるとの趣旨を述べている。兩年ともに衆議院内では全会一致の議決を見たが、同案は政府による特別予算を得られず本議会決議はなされなかった。

さらに翌年、第四十六議会において建議案の説明を行ったのが、木下成太郎であった。1923(大正12)年3月5日に開催された同議会は、委員長を木下として18名連名による「漢学振興ニ関スル建議案」審議に入った。木下による経過報告及び趣旨説明の後、文部大臣である録田栄吉より政府の賛同が得られていることを示す発言があり、この議会による議決を経て「漢学振興ニ関スル建議」は追加予算案として本議会へ提出され通過することとなった。このことから、「建議案説明の立役者」の中でも木下を別格に扱うようになったと考えられ、本誌巻頭においても木下のみが、やや大きなサイズの肖像写真を掲げられることとなったようである。

2. 「創立十周年記念号 大東文化協会 大東文化学院」について

「記念号」は、前述したように、主として「創立十周年記念大会」の記録を収めたものである。創立10周年を記念して行われた同大会は、来賓者からの祝辞を中心とする式典であり、1932(昭和7)年10月13日、神宮外苑日本青年館にてかなり大規模に開催された。

巻頭の口絵写真には、創立10周年を記念して披露され、正式に制定された「校旗」と「学院歌」がまず掲げられている。「校旗」中央の「東文」の文字のデザインは、大正末から1928(昭和2)年頃にかけて在学した

学院生によって提案されたものであり、現在まで使用されるシンボルとなった。一方、国分青厓によって作詞された下記の「学院歌」は、そもそも1930(昭和5)年9月に行われた創立7周年記念式典の頌詩として贈られたものであった。七言絶句の詩型で読まれた漢詩であり、漢詩の校歌は当時としても非常に珍しく、土屋竹雨(久泰)による書によって披露された(画像参照)。



次頁には、総長・加藤政之助とともに、副会頭・山本悌二郎の肖像写真があり、その下には九段校舎を斜めから捉えたものが掲載されている。他の来賓の個人の肖像写真はなく、本誌が記念式典の記録という目的で刊行されていることから、式典への出席者のうち大東文化協会首脳であった二人の写真のみが特に選ばれて載せられたのかもしれない。

因みに、総長事務取扱の加藤政之助の就任は1932(昭和7)年1月30日のことであり、前日の大津淳一郎総長の逝去を受けたもので、加藤は第7代大東文化学院総長となった。また、歴代大東文化協会の正副会頭職の就任経緯はやや複雑で、大東文化学院紛擾に代表される学内の混乱を受けた形で、同記念式典が開催された当時は会頭職が不在であった。小川平吉が1930(昭和5)年3月31日に第4代会頭を辞して以降、「会頭は当分欠員」とする方針となり、副会頭であった山本悌二郎が「会務処理」として会頭事務取扱の責務を負っていた。山本悌二郎は、1937(昭和12)年12月13日に逝去するが、同時に第5代会頭へ就任する処置が取られており、第6代会頭には同年12月27日付で松平頼寿が就任した。

さて、本誌の口絵写真に戻ろう。口絵は続いて、式典当日の様子を伝えるものとなり、記念祝賀会場正面入り口、山本副会頭式辞、鶴澤総明氏講演、3階席まである会場に満席の様子に来場者(聴衆)、「仕舞菊慈童」「舞踏元禄時代」「剣舞」等の演劇公演写真が5枚ほど掲載されている。

本誌の「目次」構成は、下記のようにになっている。

写真

巻頭辞	大東文化学院総長事務取扱	加藤政之助
式辞	大東文化協会副会頭	山本悌二郎

大東文化学院総長事務取扱 加藤政之助

祝 辞	内閣総理大臣	子爵	齋藤 實		
	内務大臣	男爵	山本達雄		
	文部大臣		鳩山一郎		
	宮内大臣		一木喜徳郎		
	貴族院議長	公爵	徳川家達		
	衆議院議長		秋田 清		
	東京府知事		香坂昌康		
講 演	東洋思想と現代の教育		文学博士	小柳司気太	
	大国民の思想		法学博士	蛭川 新	
	王道政治の理想に就いて		法学博士	鶴澤總明	
	大東の意義		文学博士	三宅雪嶺	
感 想	精神の糧を得よ		衆議院議員	荒川五郎	
	大東文化の源流本質及び統一について		文学博士	井上哲次郎	
	十周年記念に懷を述ぶ			今井彦三郎	
	所懷		文学博士	宇野哲人	
	学院の使命			岡村利平	
	漢学及び儒教の将来			加藤梅四郎	
	漢学の研究を盛にすべし	男爵		阪谷芳郎	
	感想			澤田総清	
	儒名儒行の者出でよ			白木 豊	
	現代と儒教			鈴木由次郎	
	創立十周年記念日を祝して			多田羅準一	
	祝辞によそへて		文学博士	建部遯吾	
	賀辞			舘森萬平	
	漢学は無用の長物ならず			田中稻穂	
	学院に関する感想二三			内藤政太郎	
	漢学の必要		陸軍中将	堀内信水	

十周日記念日に当りて	満川亀太郎
儒教の精神と形式	宮原民平
創立十年所感	枢密院顧問官 元田肇
所感	矢島玄亮
儒学所見	安井小太郎
同窓飛躍の時は来た	與繩熊雄
儒教將焉往乎	朱柄乾
舜花説	永井啓次郎
靖献義会趣旨書	細田謙蔵
一得録	山田準
頌 詩 祝大東文化学院創立十周年	山本二峰
—— 諸 家 次 韻 ——	
大東文化協会創立十周年記念誌喜	小川射山
祝大東文化学院創立十周年	仁賀保香城
大東文化学院創立十周年祝詞	西塚臥山
賀大東文化協会並大東文化学院創立十周年	上田直堂
大東文化学院創立十周年書感	亀島春江
朔風五章	土屋竹雨
立学五章	石田東陵
記 事 式典の記 講演会の記 晩餐会の記 演劇公演の記	
校旗及学院歌披露並慰勞宴の記 創立十周年記念大会来賓及出席者名簿	

以上のような目次構成であった。

これらの目次を見てわかる通り、齋藤實内閣総理大臣や山本達雄内務大臣、鳩山一郎文部大臣、一木喜徳郎宮内大臣をはじめとした閣僚のほか、貴族院議長、衆議院議長、東京府知事が来賓として祝辞を述べている。

講演者には、現職の学院教授でもあった小柳司気太と鶴澤總明のほ

か、法学博士・蜷川新や文学博士・三宅雪嶺の4人が見られた。

小柳は、東洋思想は国民教育に重要な影響を及ぼすものであり、漢字漢文の素養は東洋精神・日本精神の発展において必要不可欠であるから、大東文化協会及び学院はそれらを牽引することを主たる精神としていることを述べたものであった。蜷川は、西洋の文化も東洋の文化もともに大切であり、大東文化の役割は特に東洋の文化・学問を研究し修めた人材の育成にあって、日本の中に双方のあらゆるものが含まれることが望ましいとした。続く鶴澤は、皇道政治、東洋王道の理想について述べ、三宅は、「大東」の語の意義と由来について思うところを述べている。

「感想」中にも、「大東」とは何か、なぜ「大東文化」としたのかの意図について触れるものも多く見られた。当時にしてすでに判然とはしていないが、四書五経からの引用、あるいは東洋思想からの影響を指摘する者が多い。また、当時の学内の様子を窺うことができる内容が多く含まれており、大東文化学院の使命について、あるいは漢学教育の在り方への思いについて等、存在意義に言及するものも見られた。

なお、本誌には、参列した来賓及び出席者表も付されており、上記の他にも会計検査院長や文部省を中心に官僚が出席し、新聞社関係、近隣の中学校校長及び高等女学校校長の名も多く並んだようである。

最後に、「十周年記念出版部委員」（創立10周年委員会）は、大東文化学院教員や大東文化協会事務局を中心とした次の13名であった。

堀 秀男
川口 壽
土屋 久泰
内藤 政太郎
白井 末吉
山本 正一
小松 武治

新居 安德
浅野 善一
志賀 咲也
平野 彦次郎
樋川 智加太郎
森 忠清

おわりに

以上、大東文化協会及び大東文化学院創立 10 周年を記念して刊行された、二冊の記念誌について紹介してきた。最後に、両誌に見られた特徴をそれぞれ指摘し、まとめにかえることとしたい。

創立 10 周年記念式典にて配布したと思われる『創立沿革』は、「東洋文化振興提唱の由来」から始まり、帝国議会における 3 年間、3 度の「漢学振興ニ関スル建議案」の審議経過を詳細に説明したものであった。そのため 10 年に亘る大東文化の歩みは、附録の「重要日誌摘録」において辿ることができるが、「創立沿革」とは大東文化協会及び大東文化学院創設までの「前史」に重きを置いたものであったと言えるだろう。

一方の「記念号」は、何度も述べてきたように、記念式典の様子を伝えたものである。内閣総理大臣を始め多くの政界来賓からの祝辞を受けたことは、大東文化学院が 10 年間の国庫補助を受けて運営されていたことと深く関係していたと見てよい。同誌には、「大東」という語への言及が多く見られていることも特徴的で、このことは本学の草創期の特性が「大東」という語の由来にあったことを示している。当時にしてすでに「大東」とは何か、何を指すものであるか、は議論の対象となっていた。そして、漢学振興による東洋文化、東洋思想の涵養によって本学の発展を期したことが同誌から伝わってくるものであった。

¹ 例えば、慶應義塾は福澤諭吉が江戸築地鉄砲洲において蘭学塾を開いた1858(安政5)年を起点として1878(明治11)年に創立20周年祝賀会を開催している。また、1881(明治14)年創立の明治法律学校(現明治大学)は、1901(明治34)年に創立20周年記念式典を行い、1885(明治18)年創立の英吉利法律学校(現中央大学)は、1905(明治35)年に創立20周年記念会を行っている。大正期に至っても、1887(明治20)年創設の哲学館(現東洋大学)は、1917(大正6)年に創立30周年記念祝賀会を行った例がある。

² 木下成太郎は北海道出身の地方政治家であり、政友会北海道支部幹事長や衆議院議員を務めた。大東文化協会設立を実質的に実現した人物であると考えられている(拙稿「大東文化学院創設者たちの教育思想」『人文科学』大東文化大学人文科学研究所紀要、2012年3月参照)。

³ その遠因としては、大東文化学院紛擾に代表される内部の混乱もあったと考えられる(拙稿「井上哲次郎と大東文化学院紛擾 漢学者養成機関における『皇学』論をめぐって」『東京大学史紀要』第27号、2009年3月参照)。すなわち、大東文化協会創設から運営に携わった政治家や帝国大学出身の教員と、早稲田大学を中心とする私学出身の教員たちとの学問観、教育観の相違による争いである。本稿で紹介する両誌の内容からは、それぞれが10年をどのように振り返っているのかの一端を窺うことができ、紛擾後4年ほど経た学院内の状況を知るための一助ともなる資料となっている。